

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 21 日現在

機関番号：32621

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21320042

研究課題名（和文）「観衆論」的視座に立脚した比較美術史の試み—鑑賞現場の演劇的諸相

研究課題名（英文）Comparative art history from the perspective of the theory of the audience—various theatrical aspects of the viewing practice

研究代表者 林道郎（HAYASHI MICHIO）

上智大学・国際教養学部・教授

研究者番号：40318621

研究成果の概要（和文）：西洋、日本、中国美術史の専門家を各国から招き、12 回のワークショップと 1 度のシンポジウムを開催し、観衆論的な視座からの比較研究を進めた。イメージの提示—伝播—受容において「観衆」はどのように見出され、形成され、また応答するのか、その事例を広く検証することで、多くの基礎的な方法論的課題を確認することができた。たとえば、個人なのか集団なのか、どのような「場」（儀礼、祭礼、鑑賞…）との相互作用があるのか、仲介者（作家本人、絵解き者、美術史家など）がどのような役割を果たすのか、複製（写真複製や再制作の問題）はどのように機能するのか、というような問題群が、「観衆」という中心問題の周囲に、その歴史の変遷とともに一体のものとして可視化されてきた。そのように見出された問題群とそれに関する知見は、各分担者の個別発表の中に還元され、さらに今後発表される著作の中にも反映されていく予定である。また、本研究によって培われた国際的なネットワークも、今後の研究の進展にとって貴重な土台を形成することに寄与したことを付言しておきたい。

研究成果の概要（英文）：During the three year-period of this research project, we held 12 international workshops and one symposium all of which were connected by the central theme of “audience theory.” We invited scholars from various countries specializing in different historical periods and genres and engaged in extensive comparative investigations in order to re-vision art history from the audience-oriented perspective. In the process, a variety of key issues emerged around the issue of the audience: the difference between individual and group audience; how the relationship between the image and the audience is conditioned and defined by the nature of the “site” of encounter (ritualistic, ceremonial, or contemplative...)?; what kind of role does the mediator/agent (artist her/himself, “e-toki” performer, art historian, curator...) play?; how does the secondary means of presentation/distribution (such as the issue of “remake” or photographic reproduction) influence the reception of a particular work/image? and so on. This set of issues which are often historically specific have become visible during the three-year investigation and analyzed from the methodological perspective; the outcome of these analyses has already been reflected in the articles and presentations of each member of this project and will be further reflected in the already-scheduled scholarly output. In addition, it is important that the international network of scholars has been nurtured through this three-year project, which can function, is already partially functioning, as a foundation for a productive exchange across national boundaries .

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	7,100,000	2,130,000	9,230,000
2010年度	2,600,000	780,000	3,380,000
2011年度	4,200,000	1,260,000	5,460,000
総計	13,900,000	4,170,000	18,070,000

研究分野：美術史

科研費の分科・細目：芸術学、芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：比較美術史、観衆、受容美学、絵解き

1. 研究開始当初の背景

1980年代から大きく進んだ美術史研究の多様化の流れの中で、作品及びイメージの「意味」の生成を、作者と作品、つまり「生産」の側から見ただけではなく、「受容」の観点から見直す機運が広がってきた。イメージとそれを享受する観衆の間のダイナミックな応答関係に着目し、その変化のプロセスに注目する研究が東洋、西洋問わず、広く行われるようになり、90年代から2000年代にかけては、それらの研究が、社会史、現象学、精神分析、ジェンダー論、複製論など、様々な方法論との接触の中から多方向に深まりつつあった。西洋近・現代美術における諸研究の深まり。あるいは、仏教絵画における「絵解き」の研究の進展、中国近世における版画複製を通じたイメージの伝播と新しい観衆の形成の問題など、具体例は枚挙にいとまがないが、それらを通底する「観衆」論的な観点からの比較考察は未着手の状態であった。本研究の背景には、大まかに言ってこのような事情があり、それぞれの分野で別個に分析の俎上に乗せられている「受容」や「観衆」あるいは「観者」というような問題を、多元的に突き合わせ、比較考察することで、一方では方法論的な次元での「交通整理」が可能

になり、他方では、そういった作業から得られた知見を、個別の研究にフィードバックしていくという目論見を持ってスタートした。

さらに、体制上の背景としては、1) 上智大学内の5人の専門分野の異なる美術史研究者が在籍していたという事情があり、密な連携が期待できたということ、そして、2) そのうちの4名が国際教養学部 に在籍し、日常的に国際的なネットワークの中で仕事をしていた、研究の国際的な広がりが見込めたこと（事実、後段で報告するように、ワークショップやシンポジウムなどの約半数は英語実施された）が、本研究の出発に際して大きな要因として働いた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、第一に、「観衆」論的な視点から試みられた様々な研究の諸相を点検し、それらを比較考察することによって、方法論的な次元において「観衆」論的アプローチの可能性を探求することにあつた。第二に、それら比較考察から浮かび上がってきた諸問題を、研究分担者がそれぞれの分野において生かし、研究を深めていくことにあつた。さらに、第三に、本研究の展開を通じて、諸分野間、さらに国境を越えた学問的コミュニ

ティー間に、これまで以上に深い連携関係を醸成していき、本研究の課題を一過性のものではなく、継続的に考察していくための基盤を形成するというところにあった。

3. 研究の方法

(1) 定期研究会および出張調査：定期的な研究会（それぞれの研究を「観衆論」的な視座から見直し、問題意識を共有し、議論を深める）と、共同調査および単独調査を継続して実施。それら研究会や調査に関しては、すべて写真および動画映像で記録。また、夏季休暇などを利用して、それぞれが海外・国内調査に向き（林、松原、小林が海外）、各自の調査を進展させた。

(2) ワークショップ：2年目から3年目にかけて、12度に及ぶワークショップを開催。毎回、研究分担者の一人が主宰し、外部から研究者を数名招き、発表をディスカッションという形式で3~4時間に及び公開セッションを実施。image-audience-situationというタイトルを冠し、シリーズとして組織した。责任担当の内訳は下記の通り。これらワークショップに関しては、すべて音声付動画および写真にて記録を残した。

(3) シンポジウム：2011年11月25日、世界的権威であるジェームズ・エルキンス教授、カリフォルニア大学サンタ・バーバラ校のミリアム・ワトルス教授、武蔵野美術大学の田中正之教授を招き、観衆論的アプローチについての公開シンポジウムを開催。さらに、翌日、エルキンス教授の、新しく出版された写真論をめぐってのワークショップを開催。両イベントとも動画および写真にて記録を残した。

4. 研究成果

本研究では、以下のようなワークショップ、シンポジウムを実施し、領域や国籍を超えた

研究成果の共有と比較考察を進めることができた。企画責任担当者ごとに列挙する。

(1) 林道郎主宰のワークショップおよびシンポジウム

ワークショップ

① 発動する／させるイメージ—シュルレアリスム、アンフォルム、キャラクター (2010.10.9)。発表者：鈴木雅雄（早稲田大学教授）、近藤學（UTCP研究員）、伊藤亜紗（東京大学博士課程修了）。モデレーター：林道郎

② 美術・メディア・環境—日本の戦後美術と「観衆」の行方 (2011.7.9)。発表者：松井茂（東京芸術大学）、成相肇（府中市美術館）、伊村靖子（京都市立芸術大学）。モデレーター：林道郎

③ Experiencing the Remake: Contemporary Stagings of Japanese Post-war Art (2011.9.9)。発表者：Ming Tiampo (Carleton University), Mika Yoshitake (Hirschhorn Museum), Izumi Nakajima (一橋大学)。モデレーター：林道郎

④ Sites of Spectacle and Encounter: Animated Spaces, Mediated Cities, Curated Islands(2012.2.3)。発表者：Ken Oshima (University of Washington), Julian Worrall (Waseda University), Alex Bueno (Harvard University)。モデレーター：林道郎

⑤ Re: *What Photography Is*---Discussion with Prof. Elkins (2011.11.26)。モデレーター：林道郎

シンポジウム

① イメージに憑かれて：観衆論的視座にたった美術史の新しいパースペクティブ (2011.11.25)（上智大学比較文化研究所共催、下記URL参照）。発表者：James Elkins (The Art Institute of Chicago), Miriam Wattles (University of California, Santa Barbara), 田中

正之（武蔵野美術大学）。モデレーター：林道郎

http://icc.fla.sophia.ac.jp/html/events/2011-2012/111125_Sacred_Materiality_Unit.pdf

(2) 平澤キャロライン主宰のワークショップ

① “‘Public’ and ‘Private’ Interactions with Esoteric Buddhist Art: Transmission, Transformation, and Context.” (2010.5.18)、発表者：Cynthia Bogel (University of Washington)、Karen Mack (Atomi University)、Elizabeth Tinsley (Otani University)。コメンテーター／モデレーター：Marco Gottardo (Tamagawa University)

② “Violence, Viscerality, and Religion in Sixteenth and Seventeenth-Century Art and Material Culture: Cross-Cultural Comparisons” (2010.12.1)。発表者：Bronwen Wilson (University of British Columbia)、Tatsuo Murakami (Sophia University)、平澤キャロライン。モデレーター：中谷一（立教大学准教授）

③ “Audiences of Early Modern Hell Painting (近世地獄絵の観衆)” (2011.11.12)。発表者：渡浩一氏（明治大学）、小栗栖健治氏（兵庫県歴史博物館）、福江充氏（富山県立山博物館）、モデレーター：米倉迪夫

(3) 米倉迪夫主宰のワークショップ

① 絵解き研究の現状について：観察と関与 (2009.12.12)。発表者：阿部泰郎氏（名古屋大学）、村松加奈子氏（龍谷大学龍谷ミュージアム）、モデレーター：米倉迪夫

② 日本中世美術における作品と観衆の関係をめぐって (2010.11.13)。発表者：鷹巣純氏（愛知教育大学）、山本聡美氏（共立女子大学）、加須屋誠氏（奈良女子大学）、モデレーター：米倉迪夫

(4) 小林宏光主宰のワークショップ

① “中国絵画と観衆” —中国美術における絵画作品(肉筆画及び版画)と受容者の応答関係 (2011.2.18)。発表者：井手誠之輔（九州大学）、板倉聖哲（東京大学）、小林宏光。コメンテーター／モデレーター：大木康（東京大学）

(5) 松原典子主宰の「観衆論」ワークショップ

① 16、17世紀のスペインと新大陸における観衆の形成、および作品と観衆の相応関係をめぐる事例研究 (2011.5.28)。発表者：岡田裕成（大阪大学）、松原典子。モデレーター：林道郎

全体として、「観衆論」という観点からの幅広い比較研究が実現し、方法論的知見から具体的な事例研究に至るまで、多岐にわたる検討がなされ、今後の研究の展開の基礎をつくることができた。また、上記のワークショップやシンポジウム、さらに下記の論文や学会発表の事例を見ても明らかのように、日・英両語にわたる交流と発信が今回のプロジェクトにおいて定着したことは国内の美術史学コミュニティにおいて大きな意味を持つものと思われる。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 12 件)

① 林道郎、”Tracing the Graphic in Post war Japanese Art,” *Tokyo 1955-1970* (exhibition catalogue), Museum of Modern Art, New York, November 2 012 (being printed).

② 平澤キャロライン、”Cracking Cauldrons and Babies on Blossoms: The Relocation of Salvation in Japanese Hell Painting,” *Artibus Asiae*

(査読済、2012年出版予定)

- ③ 米倉迪夫、「足利氏の肖像—神護寺画像から考える」(峰岸純夫・江田郁夫 編『足利尊氏再発見—一族をめぐる肖像・仏像・古文書』吉川弘文館(2011.10)、11-49頁)
- ④ 松原典子、「17世紀スペインの聖体容器型(キリスト横臥像)に関する考察—サン・パブロ修道院所蔵のグレゴリオ・フェルナンデスの作品を中心に」、『上智ヨーロッパ研究』、v. 3: 3-28. (2010)
- ⑤ 林道郎、「三島の残像: 森村—ターンプルーウォール」、『MISHIMA!: 三島由紀夫の知的ルーツと国際的インパクト』、昭和堂、2010年10月、100-124頁
- ⑥ 米倉迪夫、「描かれた明石—法然上人伝法絵と一遍聖絵」(『日本中世絵画のマトリックス』青簡社)(2010.9)、315-323頁
- ⑦ 林道郎、「Notes on Michael Fried's Why Photography Matters as Art as Never Before,」 *Photographers' Gallery Press*, no. 9 (May 2010), pp. 61-69.
- ⑧ 小林宏光、「Seeking Ideal Happiness: Urban Life and Culture Viewed through Eighteenth-Century Suzhou Prints,」 *The Printed Image in China from the 8th to the 21st Centuries*, ed. Clarissa von Spee, The British Museum, London, May 2010, pp.36-45.
- ⑨ 小林宏光、「筆描と刻線の接近: 容與堂刊『水滸伝』(1610序)の挿絵版画と明代の山水画」、『日本文字文化を探る—一日仏の視点から』、クリストフ・マルケ他編、勉誠出版、東京、2010年3月、251-278頁
- ⑩ 小林宏光、「中国画譜の集大成—『芥子園画伝』初集・二集・三集の全貌—」、『芥子園画伝』、大東急文庫編、2009年10月、勉誠出版、III、397-417頁
- ⑪ 米倉迪夫、「鎌倉時代風景画への覚え書き—風景とその景観属性をめぐる—」(『文学』9、10月号(10-5)特集=語りかける絵画—イメージ・テキスト・メディア

ア(2009.9)、100-120頁

- ⑫ 小林宏光、「In Search of the Cutting Edge: Did Ukiyo-e Artists Borrow from the Erotic Illustrations of Chinese Fengliu juechang tu?」 *Orientalizations*, Volume40, Number3, April 2009、査読有、pp. 62-67. (English)

[学会発表](計7件)

- ① 米倉迪夫、「Tales of a White Horse」(Scholars' Day: Storytelling in Japanese Art, The Metropolitan Museum of Art)(2012.3.12)
- ② 小林宏光、「Edo Period Reception of Published Art from the Kangxi through the Qianlong Eras: The Mustard Seed Garden Manual of Painting and Its Japanese Audience of the Eighteenth Century」、宮廷與地方: 乾隆時期之視覺文化国際討論会(Visual Culture in the Era of Emperor Qianlong)、台湾大学、2011. 12. 16
- ③ 米倉迪夫、「玄奘の画像と伝記絵」奈良国立博物館夏期講座『玄奘三蔵とシルクロード』(2011. 8. 25)
- ④ 米倉迪夫、「Format and function: on hanging scrolls depicting the lives of eminent monks」(The 2010 John C. Weber Symposium on Japanese religion and Culture: Images and Objects in Japanese Buddhist Practice. Columbia Center for Japanese Religion)(2010. 10. 7)
- ⑤ 小林宏光、「Literati Tastes Meet Popular Drama: The Multi-Colored Woodblock Illustrations of Min Qiji in the 1640 Printed Edition of The Romance of the Western Chamber」、International Symposium on Chinese Color Prints, Sotheby's Institute of Art and London University, May 22, 2010 (English)
- ⑥ 林道郎、「彫刻」と「拡張」の考古学的序説、美学会(於東京大学、2009. 10. 12)
- ⑦ 林道郎、「ロスコ・チャペルについて」(UTCP ワークショップ「ロスコの経験—注意 拡散 時間性」、於東京大学、2009. 5. 22)

〔図書〕（計 2 件）

- ① 鈴木雅雄＋林道郎、『シュルレアリスム美術を語るために』、水声社、2011 年 6 月。
- ② 林道郎、『Mel Bochner (New York: Akira Ikeda Gallery), December, 2009

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

〔その他〕

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

林道郎(HAYASHI MICHIO)

上智大学・国際教養学部・教授

研究者番号：40318621

(2) 研究分担者

米倉迪夫 (YONEKURA MICHIO)

上智大学・国際教養学部・教授

研究者番号：70099927

（2009 年～2010 年まで）

小林宏光(KOBAYASHI HIROMITU)

上智大学・国際教養学部・教授

研究者番号：40195805

平澤キャロライン(HIRASAWA
CAROLINE)

上智大学・国際教養学部・准教授

研究者番号：10535454

松原典子(MATSUBARA NORIKO)

上智大学・外国語学部・准教授

研究者番号：10338428